
死物語【こよみメメ】

黒貂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死物語【こよみメモ】

【Nコード】

N2068BA

【作者名】

黒貂

【あらすじ】

皆死んだ。

戦場ヶ原も、八九寺も、神原も、千石も、羽川も、火憐ちゃんも、月火ちゃんも、影縫さんも、臥煙さんも、斧乃木ちゃんも、貝木も、忍野も、忍も。
皆、死んだ。

こうなったらさ、もう逃避するしかないよな。
だから、待ってろ皆。

僕もすぐ、そっちに逝くから。

001 (前書き)

思い立ったが吉日

と、いう訳で、思い付いた日にパパッと書いて投稿しちゃいました↑

【001】

今から僕の友好関係についての話をしようと思う。

あまりに幼稚で低レベルで、聞くにたえない部分もあるかもしれないが、よかったら聞いて欲しい。

……いや、聞いて欲しいと言ったがそれは嘘だったかもしれない。

これは僕の友好関係を現す話でもあるが、同時に一方的に弄ばれた話でもある。

失敗談と言っても差し障りないかもしれない。

だから正直なところ、聞かれるのは少し恥ずかしかったりもする。

でもまあ、こんな僕に興味を持ってくれるのなら、聞いてくれればいいと思う。

弄ばれたとは言え、決して嫌な気分になったりする事はないのだし。

よく間違われるのだが、僕は人付き合いが嫌いな訳ではない。

確かに学校では羽川や戦場ヶ原以外と喋った事は殆どないし、友達には限りなく少ない。

年賀状だって届かないし、ケータイにはほんの少ししか番号が登録されてない。

しかし。

しかしだ。

前述したように、僕は決して人付き合いが嫌いな訳ではない。

苦手と言われれば否定は出来ないかもしれないが、むしろ好きだ。

実は前世が同じなんじゃないかと疑っている、八九寺真宵との絡みを見てくれればそれは十二分に理解してくれると思う。

じゃあ何故今こんなに友達が少ないかと言うと、やはり一番大きいのはレベルの高い学校に入り落ちこぼれ、馴染む機会を失ってしまったからだろう。

しかしそんなのは今からの僕の頑張り次第でなんとでも出来る。

じゃあ何故友達を積極的に作ろうとしないのかと言うと、それは僕が春休みに吸血鬼に襲われた事から由来する。

あれ以来僕は怪異という存在を知り、数々の怪異を見てきた。

怪異を知れば怪異に曳かれる、だそうだ。

そしてそのおかげで僕は、何度も危険な目に遭い何度も皆に迷惑をかけた。

つまり何が言いたいかと言うと、怪異を知ってしまった以上、怪異を知らない人間を巻き込む訳にはいかないのだ。

僕は大変な馬鹿で、誰かが困っていたら見過ごす事は出来ない。

ゆえに僕はもし怪異に困っている人がいたら助けようとする。

それは殆どイコールで皆に迷惑をかけ、心配をさせる。

だから、どうしても僕は自分から積極的に友達を作る気になれない。と、というのが理由の一つだ。

しかし、怪異に関して唯一、そんな配慮を必要としない友人がいる。妖怪変化のオーソリティ。

全国を放浪するアロハのおっさん。

吸血鬼に襲われた僕を助けてくれた、忍野メメだ。

彼は軽薄でチャライが、怪異に関しては誰よりも頼りになり、とても面白い（笑わせてくれるという意味ではない）存在だ。

さて、前置きが例のごとく無駄に長く――え？短いって？ははは。

元気いいな、なんかいいことあったのか？

忍野メメの決め台詞を借りたところで、いい加減そろそろ始めよう。僕と友人の、シリアスに見せかけた、ただのじゃれ合い話を。

【002】

一番最初は八九寺眞宵だった。

彼女はくらやみに追われていた。

彼女自身が自分からそう望んでそうした訳ではないにしろ、彼女は結果として怪異として嘘をついていた。

そしてそれを知った彼女は、僕達を巻き添えにしてしまう前に、自分から消えて逝った。

次は戦場ヶ原ひたぎだった。

彼女は卒業式の日に殺される予定だった僕を助けるために、たった一人で蛇神と化した千石撫子に立ち向かった。

しかし専門家ではない彼女に何か術がある訳でもなく、あっさり惨殺された。

だが彼女は無駄死にをしに行った訳ではなかった。

彼女は貝木から大金を払って聞き出したという呪いで、千石撫子を道連れにする事に成功した。

その次は阿良々木火憐と阿良々木月火だった。

彼女達は正義ごっこで常に敵がいた。

そしてある日、彼女達はその敵に拉致されレイプされ、挙げ句の果てにその様子を撮影されネットに流された。

そして後日、全裸で精液にまみれ、犯し殺された二人の死体が見付かった。

両親はそのせいで心を病み、首吊り自殺した。

その次は神原駿河だった。

彼女は完全に鬱状態だった僕のために、毎日のようにうちに励ましに来てくれた。

しかしある日うちに来る途中、いつものように走っていた彼女は大型トラックに激突され、壁とトラックに挟まれて潰れ死んだ。遺体は見せてくれなかった。

その次は斧乃木余接と影縫余弦と貝木泥舟と臥煙伊豆湖だった。

彼らはこの連続して僕の周りに死人が出る事に何らかの怪異性を感じたらしい。

だから何が起っているのか探るため、大学時代のメンバー全員で調べる事にした。

しかし忍野メメだけはなかなか見付ける事が出来なかった。

全国を放浪している忍野メメは、文明を嫌うため痕跡が残らないのだ。

しかし万全を期したい臥煙伊豆湖達はあらゆる手を使って探し続けた。

探し続けていたのだが、その探していた全員が死体になって発見された。

その死体は、喉が切り裂かれ、内臓は飛び出し、頭は欠け、足は引きちぎれて、皮膚が剥がされた、明らかに事故などではなく、殺されたとわかる惨いものだった。

全員が死んだ上に、忍野メメの手がかりは掴めず、忍野メメも死んでいる可能性が高いと羽川翼は予想した。

……そして……羽川翼。

彼女は今……僕の腕の中にいる。

僕の腕の中で苦しんでいる。

静かに……しかし怒りながら。

「……阿……良々木君……。なんで……。なん……。で……。こんなこと……。した……。の……。……。駄目……。だよ……。……。こんな……。……。駄目……。だよ……。……。逃げ……。ちゃ……。……。駄目……。だよ……。阿良々木……。君……」

それが最後の言葉になった。

……お前は最後まで僕の心配ばかりしてくれるのか……。
自分が僕に殺された事よりも……僕が逃げる事の方が重要なのかよ……。
そこは……僕に……。なんで殺したんだって……。殺すなんて絶対にしちゃいけない事だって……。怒ってくれるとこだろうよ……。

「逃げちゃ……。駄目だって……?」

『……逃げ……。ちゃ……。……。駄目……。だよ……。』

……言われたばかりの言葉を思い出し……。何度も反芻する……。

「そんなの……。……。そんなの……」

無理だろ。

……とは言わなかった……。

否……。言えなかった……。

「僕には無理だ……」

……やっぱり言った……。

耐え切れなかった……。

枯れたと思っていた涙は……。羽川が死ぬ前からとめどなく溢れ出ている……。

……ごめん……。羽川……。

でも……。そんなには苦しくはなかっただろう？

ちゃんと苦しくない方法を調べて…ちゃんと準備をして…ちゃんと実行したんだ…。

僕にしては上出来だと思う…。

忍野が言ってた通り…お前はなかなか隙がなかったから難しかったけど、ちゃんとやれたぞ…僕…。

…安心しろ…羽川。

僕もすぐに…お前達のところに行くから…。

…すぐにこんな現実を抜け出して…お前達が待っていてくれてるそっちにいくから…。

そうして僕はポケットから小さなビンを取り出し…その中に入っている錠剤をありったけ手の平に出す。

毒。

…吸血鬼は不死身だが…不死力が尽きればその限りじゃない…。毒だって効く…。

…それでも一般人に比べれば致死量に天と地ほどの差があるが…致死量はある事にはかわりない…。

今手の平の上にある毒はほんの数十錠ではあるが…一粒でシロナガスクジラがあっさり死ぬくらいの猛毒だ…。

吸血鬼もどきの僕でもきつと…殺してくれるだろう…。

吸血鬼の死亡原因の九割は自殺で…さらにやり方は太陽に身を晒すという投身自殺らしいが…こっちの方が絶対確実だし楽でいいと思う…。

…いや…大抵の吸血鬼は太陽に身を晒したら殆どすぐに蒸発するのか…。

伝説となったキスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードに噛まれた僕だから…不死力が異常なんだ…。

まあ…今は忍に血をやっていないから限りなく人間に近いけど…。

そういえば最後に血をやったのはいつだろう…。
もうかなり昔のような気がする…。

…：…：…：…：…：最近忍の姿をめつきり見ないと思っていたら…：そうだったのか…。

彼女もまた…：死んでしまったのか…。

死んだのだ…：旧キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレード、忍野忍は…。

そうか…：また死人が増えたのか…。
なに…：たった一人増えただけだ…。

もう僕は死には慣れたんだ…。

こんなの慣れっこだ…。

これだけ死んだなら…：一人くらい死んだってもう何も思わない…。

…：…：訳がない…。

忍と僕は言葉で言い表しづらい複雑な関係だった…。

が…：数ヶ月前までは…：和解もして…：それなりに楽しい日々を送っていたんだ…。

何も思わない訳がない…。

気付くのが遅れた事が…：更に罪悪感を感じさせる…。

しかし…：だったら早く死ななきゃいけない…。

忍が明日死ぬのなら…：僕の命は明日まででいい…。

忍が今死んでいるのなら…：僕は命を一刻も早く捨てなければなら
ない…。

そういう…：関係なのだ…。

…：これじゃあ…：まるで死ぬのを躊躇してる僕が死ぬために…：お前が
背中を押してくれてるみたいだな…。

最後まで迷惑かけっぱなしで悪い…。

…：…：ありがとう…。

……さあ…もう十分に考え事はした…。
後悔なんて…ありすぎてしていない…。

これで終わり…。

これで終わるのだ…。

この苦しみから…逃れる事が出来るのだ…。

羽川は最後にああ言ったけど…逃避は決して悪い事じゃあない…。
それは羽川が教えてくれた事の一つだ…。

だから…羽川…。

「僕は逃げる。正々堂々と、胸を張って、ここから逃げる」

そして手の平の小さな山を口に放り込――

「全く、何やってるのさ。阿良々木君」

めなかった。

手をはたかれ、薬を全て落としてしまう…。

しかしその声には聞き覚えがあった…。

振り向くと

「な…っ…お前…」

そこにいたのは

「はっはー。元気いいねえ、何かいいことでもあったのかい？」

【003】

「…………お…忍野……」

……そこにいたのは忍野だった…。

「んー。でもどうやら見る限り、ちょっと間違っちゃったようだねえ。元気はなさそうだ、はっはー」

……飄々とした様子でそこにいる…。

…間違いない…。

忍野だ…。

…忍野メメが、やっと現れたんだ…。

……でも…。

「…………遅えよ…。遅すぎんだよ…」

「僕としては大急ぎで駆け付けたつもりなんだけどね」

「もう皆死んだんだよ!!」

……こんな時にも飄々とした態度に腹が立ち、怒鳴ってしまふ…。
……しかしそれでは収まりきらず、続ける…。

「八九寺も、戦場ヶ原も、千石も、火憐ちゃんも、月火ちゃんも、

神原も、斧乃木ちゃんも、影縫さんも、臥煙さんも、貝木も、羽川も……皆死んだんだよ!! 遅いにも程があんだよ!!」

……怒鳴りつける…。

…ただの、八つ当たりだ…。

……忍野が悪い訳じゃないのはわかってる…。

……でももっと早く現れていれば。

もっと早く現れていれば、どうにかなったんじゃないかと思ってしま…。

「どこで何やってたんだよ……。…お前がいれば…。お前がいれば、何とか出来たんじゃないのかよ!」

「そんな怒鳴るなって。全くさっきと違って元気いいなあ。何かいいことでも「ねえよ!」

遮る。

……そんな、人を馬鹿にした台詞なんか、聞きたくないんだ、忍野…。

「いい事なんかこれっぽっちもねえよ! 嫌な事だらけだよ! なんで僕がこんな目に――」

「被害者面が気に食わねえつつってんだろーが!!」

「っ」

…怒鳴り返された。

……こんなの、初めてだ。

説教を喰らったり怒られたりした事はあっても、こんな風に怒鳴ら

れた事はなかった。

今まで忍野からは一切感じた事のない、殺気を帯びた視線…。
これが本当に忍野かという、鋭い目…。

……怖い…怖い……………。

視線とか…迫力が怖いんじゃない…。

忍野…：僕にはもうお前しかいないんだ…。

…僕を…：責めないでくれ…。

……僕を……見捨てないでくれ…。

「…ふう。やっぱり人を睨むのって疲れるねえ。まあ効果は十分あったみたいだからいいか。安心していいよ。僕は実際怒ってなんかいないからね」

…一瞬でいつもの表情に戻った。

……とりあえず、怒っている訳ではないらしい事に少し安心…。

…しかし…。

「……僕が…加害者だったのかよ」

……あの時は…：春休みの時は、僕が間違いなく加害者だった。
被害者面してたのを…：忍野に指摘されたのを覚えている。

だが…今回は断じて違う…。

僕は何もしていない…。

しなきゃいけない事をやらなかった訳でもない…。

自分から何か首を突っ込んだ訳でもない…。

だから今回は…僕は被害者なはずだ…。

純粹な…蛇切縄の時の千石のような…完全な被害者なはずだ…。

「全く阿良々木君は…。えーと、どこに居たんだっていう質問だった？その質問に答えると、僕はその時どこにもいなかったんだよ」

「……は…?」

「厳密に言えば、この世界にはどこにもいなかったと言った方がいかな。…はあ、いい加減気付いてくれないかなあ、阿良々木君」

「……なんにだよ…」

……意味がわからない…。
何に気付けというのだ…。

「全く阿良々木君は…。…って、もうこれも二回目だね。全く阿良々木君はが口癖になっちゃいそうだよ。あれだけ怪異に関わったんだから、怪異の事を調べようとか思わないのかな。ちよつとでも調べていたなら、確信するまではいかなくとも、可能性の一つとして考えられると思うんだけどなあ」

……なんだよ…。

…僕が何に気付いてないってんだよ…。

…勿体ぶって見透かすだけ見透かしてないで、早く言ってくれよ…。

「早く言えって感じの顔だねそれは。全く阿良々木君は世話がかかるよ。でも頼られてると思えば悪い気はしないかな。意外と甘いん坊だよ、阿良々木君は。おっと、そんな目で見ないでくれよ、こっちまで暗い気分になっちゃうじゃないか。仕方ないな、教えてあげるよ。この世界はね、夢なんだよ、夢。阿良々木君の、夢の世界」

「……………はあ…?」

……夢の世界…?

これが、僕の望んだ通りになる世界だとも言うのか…？

…いや、そんな訳はない…。
ならなんだ…。

何かの比喩なのだろうか…？

「比喩なんかじゃないよ。ここは、紛れも無い君の夢の中なんだ。ツンデレちゃんが死んだのも、委員長ちゃんが死んだのも、全部夢なんだよ。はっはー、大胆なネタバレになっちゃったね。これは、全て夢でしただっていう夢オチなんだよ」

「……いや…ちょ…待てよ…。意味わかんねえよ…。…なんだ…？
僕は数ヶ月にも渡る長い夢を見ているとも言うのか…？」

「そうだよ。君が体験したように思える数ヶ月は、全部夢なんだ。全部、何もかも、夢なんだ。現実の阿良々木君はここ一週間くらい寝込んでるよ」

「一週間……。じ、じゃあお前は一体なんなんだよ。今ここに居るお前は、一体なんなんだよ！お前も僕が作り出した夢だって言うのかよ！」

「いや、僕は僕さ。妖怪変化のオースリティ、忍野メメ。夢に関する怪異も沢山いるからねえ。人の夢の中に潜り込む手段を持っている事くらい推理出来ないかな」

「……。助けに、来てくれたのか？」

「助けない。君が勝手に助かるだけ」

「……現実では、誰も死んでないんだな？」

「死んでないね。皆ピンピンしてるよ」

「……………うつ…うつ…」

「おいおい、泣き出すなよ。まだ阿良々木君が助かった訳じゃないんだぜ？」

死んでない。

皆、死んでないんだ。

これはただの夢で、いつものように怪異絡みの厄介事に巻き込まれただけなんだ。

そう思ったら、涙が溢れてきた。

さっきの羽川を殺した時の涙とは違う。

嬉し泣き、だ。

「大した友情だねえ。生きていてるのがわかったただけでそんなに喜んでくれるとは。伝えた僕としても嬉しいよ」

当たり前だ。

皆、あんな惨い死に方をした。

と僕は思っていたんだ。

それが、実は夢でした、皆死んでません。

って言われたんだぜ？

拍子抜けもいいとこだ。

……………そして、嬉しい裏切りもいいとこだ。

……………さて、いい加減気持ちを切り替える必要があるようだ。

正直、切り替えるのは無理に等しい。

夢とは言え全員死ぬのを体験したのだから。

今だってかなりの鬱だ。

死ねと言われたらすぐに死ねる。

それがいきなり全て夢だと言われ、かなり混乱もしている。でも、切り替えなきゃいけない。

忍野の話だと、これも怪異の仕業なのだ。

一週間も僕は寝込んでいるらしい。

これ以上皆を心配させる訳にはいかない。

だからさっさと解決して、さっさと目覚めよう。

きっとそこには、最高の目覚めが待っているはずだ。

「……悪い。もう大丈夫だ。状況は……正直まだよくわかってないけど、とにかく僕はまた怪異に曳かれたんだな？夢に関する怪異に」

「おや、もう復活したのかい？強がらなくなっちゃったいいんだよ。僕はそのくらいわかってるから。でもまあ、そういう事かな。多分だけど」

「多分て…。お前でもまだ全てはわかってないって事なのか？」

「いや、そんなもんじゃない。殆どわからないよ。お手上げ状態さ」

「何!？」

忍野が……お手上げ状態だと？

あの忍野をもってしてもわからないって事は…。

僕、ひょっとして今とんでもないピンチなんじゃないか？

「夢に関する怪異ってのも、実は確証を持ってた訳じゃないんだよね。試しに阿良々木君の夢に入ってみたら合ってたって感じかな。まぐれ当たりだよ、はっはー」

「マジかよ…。……でも、心当たりくらいはあるんだろう？夢に關するってどこまでわかってるなら、ある程度絞れてるはずだ」

「いや、それが全く心当たりがないんだよ。夢を見せるって怪異はいくらでも居るんだけど、こんな人を絶望に陥れる夢を見せる怪異なんてものは寡聞にして聞いた事がないんだ。……ただ、これは僕の勘だったりもするんだけど、この怪異の目的はなんとなくわかったかな」

「目的？」

……ふむ。

目的がわかってるなら対処のしようもあるか…。

……よかった。

お手上げとか言われた時は本当にかなり焦ったが、それなら何とかなるかもしれない。

首の皮一枚繋がった気分。

……本当よかった。

「なんだよ、目的って」

「阿良々木君を殺すこと」

「………は…？」

今、何か変なこと言わなかったか？

誰か……具体的にはこの僕を殺す……とか、なんとか…。

「だから、阿良々木君を殺す事が、この怪異の目的であり、ここに

居る理由なんだと思うよ」

……………。

繋がったと思った首の皮一枚が千切れる幻聴が聞こえてしまうという、精神をかなり病んだ高校三年生男子がここに居た。
ていうか、僕だった

【004】

「……どういう事だよ、忍野」

この怪異の目的は、理由は、僕を殺すこと？

……いや、意味わかんねえよ。

なんだよ、殺すって。

「どういう事って、そういう事だよ。この正体不明の怪異は殺す事を目的とした怪異で、今回は君が狙われたというだけの事じゃないか。普通普通。至って普通さ」

「ああ成る程。そういう事か。だったら普通だな。……なんて言えるかっ！」

ノリツツコミだ。

ただ切れ味は無いに等しく、滑り気味だった。

……いや、でも殺す事が目的ってなんなんだよ。

殺人鬼か？

殺人鬼の幽霊でも僕にとり憑いたのか？

「全く阿良々木君は……。……って、また言っちゃったよこれ。口癖になっちゃったじゃないか、どうしてくれるんだい」

知らねえよ。

そんな自分で直せ。

ていうか、何度も言われて悲しくなるのはこっちなんだからな。とは言わない。

話を逸らしてる場合じゃないんだよこっちは。命狙われてるかもしれないんだぞ。

「……で、本当一体なんなんだよ。それが目的だってわかってるなら、そう考える根拠ってものがあるんだろ？せめてそれを教えてくれよ」

「だから言ったら。勘だよ、勘。専門家としての勘」

「……因みに勘が外れることは？」

「何故だか、僕は勘に従って間違いを犯した事はないよ」

「……だろうな」

だとすると…。

いや、考えるまでもなく、そうなんだろう。

この怪異は、僕を殺したいんだ。

忍野が言うなら間違いない。

「ていうか阿良々木君、本当に怪異の事全く勉強してないんだね。君は人を殺す事が目的の怪異が居ることに驚いていたようだけど、僕は君に驚いたよ。人を殺す事を目的とした怪異なんてさらに居るっての。普通に考えたって、殺人癖があつた幽霊とか、逆に殺されて人を憎しみ片っ端から殺していく幽霊とか、いくらでもあるじゃないか。それに何度も説明したと思うけど、怪異っていうのは人の思いによって生まれるんだ。人が思い、信じ、奉り、畏れ、敬う事

によって成立するんだ。つまり大雑把に言ってしまうと、誰かが何かを考えて、それが噂で沢山の人が知るようになれば、それが何であれ怪異になるんだ。だから怪異っていうのは無限に居るし、増え続け、消え続ける。ゆえに人を殺す事が目的の怪異なんて居たって至って普通だし、当たり前なんだよ。……って、おいおい阿良々木君？なんでまた泣いてるんだい君は。本当に元気いいなあ。何かいいことでもあったのかい？」

は？

泣いてる？

何言ってるんだよ忍野……って、あれ！？

本当に頬が濡れている！？

……こんなことで、無意識のうちに泣いてたのか…。

……そんなに、僕の場合は参ってるのか。

……そうだな、この怪異は、僕を殺そうと、僕に自殺させようとしたんだから。

「いや、ちょっとな。……お前にこんな風に説教されるの久しぶりだし、夢とは言えあんな目に遭ったあとだし、それがいきなり夢だっって言われたし、なんか……色んな感情とか思考がごっちゃになってるけど……。でも、なんだろう……多分……嬉しい、んだと思う。久しぶりにお前に会えた事が。長ったらしい説教されて、やっとお前に会えた実感がわいてきたんだと思う。お前が来てくれて、安心出来たんだと思う」

しまった。

なんか思った事全部言っちゃって、恥ずかしい事まで口走った気がする…。

……恥ずかしい…。

忍野の顔直視出来ねえよ…。

「おいおい阿良々木君。そんな事言われちゃあ僕だって恥ずかしいじゃないか。恥ずかしくて君の顔を直視出来ないよ」

お互いを恥ずかしくて直視出来ない高校三年生男子と中年のアロハおっさんがそこには居た。
ていうか僕達だった。

……きもっ。

「こ、こほん。とにかく、僕は怪異に命を狙われているんだな？夢の中で皆を殺したのも、僕を精神的に追い詰めて自殺させるため、って事なんだな？」

切り替える。

切り替えは重要だ。

いつまでもこんな気持ち悪い雰囲気にいる訳にはいかない。

……マジで気持ち悪かった。

うえ…。

「ああ、間違いないと思うよ。ていうか、そうでないならこんな事する意味がない。夢とは言え何ヶ月もかけてるのは不思議だったけど……。どうやら、阿良々木君を不幸のどん底に落としてから殺したいようだね」

「不幸のどん底に落としてから殺す…」

なんて悪趣味な怪異だ…。

そんな怪異まで居るのかよ。

……世も末だな、リアルな意味で。

「ああ、多分ね。…大方、自分を不幸だと思ってるどっかの馬鹿達が幸せな奴を憎んで、それが呪いにでもなったんじゃないかな。阿良々木君、最近彼女も出来たし友達も増えたよね。正義マンな君にとってそれは、とてつもない幸福だったんじゃないかい？だからたまたまその呪いに目を付けられた。今のところ僕はそう思っているけど」

「……それ、僕加害者か？」

さっき忍野に被害者面が気に喰わねえつつってんだよ、と言われたのを思い出す。

そう言われてさっきから心当たりがないか考えたり、反省したりしていたのだが…。

「加害者だよ。リア充は僕みたいな非リア充からしたらムカつくことこの上ないからね」

「ただの八つ当たりじゃねーか！」

反省なんかした僕が馬鹿だった！
返せ！僕の反省を返せ！

「はは、ナイスツツコミだよ阿良々木君。それでこそ阿良々木君ってもんだよな」

「僕の個性がツツコミだけみたいに言うのをやめろ。ていうかふざけんな。そんな理由で命狙われて堪るか」

「いや、それに関してはふざけてなんていないよ。阿良々木君が狙われた理由としては概ね合っているはずさ。怪異なんてそんなもん

だからね」

「……………」

マジかよ。

……納得出来ねえ。

「でもそれにしたって阿良々木君。本当にこの世界が夢だって事に気付かなかったのかい？」

「ん？ ああ、全く気付かなかった。ていうか今だって信じられないくらいだな、ここが夢の中なんて。こんな現実的な夢があるのかよって感じ。頬をつねっても痛いだけで覚めなかったし」

「……現実的、ねえ……」

「なんだよ。おかしいところあるのか？ 僕からしたら全てが現実と全く変わらないんだけど」

「……阿良々木君って、巨乳が好きなんだっけ」

「なんだよ藪から棒に。……まあ、そうだよ、悪いか」

「いや、別になんてことないさ。決して町行く人全てが、服がぱつんぱつんになるくらいの巨乳美人だったのが気になったりしてる訳とかじゃないよ」

？

意味がわからない奴だな。

どこか残念なものを見る目で僕を見ている気がするのは気のせいだ

ろうか。

いや、そんな訳がない。

気のせいと信じよう。

「……まだ信じられないようだから、わかりやすいのをいくつか指摘してあげるよ。そうだね、まず、百合っ子ちゃんが車に衝突されて死ぬ訳ないだろう？彼女の運動能力なら絶対避けられるし、それが無理だったとしても左腕を使えば車を止めるくらい造作もないだろう。次に臥煙先輩達。彼らが死ぬ訳ないだろう。そしてこれは決定的だね。委員長ちゃんはどうしたの」

羽川は今ここには居ない。

さっき僕が殺したばかりにも関わらず、だ。

「死体が……無い」

「君が気付いたからね。もう居る必要がなくなかったから消したんだろう。あと、今はまだ混乱しているせいで難しいだろうけど、大抵の事は何でもできるんだぜ、阿良々木君は。なんせ君の夢の中なんだからね」

「……………」

「……阿良々木君、何でも出来るからって、自分の身長を高くするのは虚しくなるだけじゃないのかい？」

とりあえず、ここが夢なのはよくわかった。

……いいな、ここ。

「……まあ、それはもういいや。今はもうちゃんと夢だって事に気付

いてる訳だしね。それがわかってるならいいんだ。じゃあそろそろ、今からの事について話そうか」

「今から？」

「ああ、そうだ。今からのこと。阿良々木君は今怪異に命を狙われている。しかし一度それを回避した。……これがどういう事かわかるかい？」

「どういう事？」

「どういう事って、そういう事じゃないのか？」

「殺されそうになったのを回避した……って、そうか、今してるのは今からの話か……」

「て事は……」

「やっとわかったのかい？ 全く阿良々木君は。もっと早く考えつこうよこの程度」

「うるせえ。急展開過ぎて頭がついていってないんだから仕方がないだろ。……つまり、まだ夢が覚めてないって事は怪異はまだ僕を諦めてなくて、これから僕を殺そうとしてくる。そして一度失敗してるから今度はもっと確実に僕を殺しにかかってくるかもしれない。更に言うならどんな怪異かも完全にわかってる訳じゃないから対処法も完全には立てれない。って事だろ？」

「おお、ご名答だよ阿良々木君。なかなか成長してるじゃないか」

「ま、お前がどっか行ったあとにも色々あって色々反省したからな。……ていうかさ、忍野」

「なんだい、阿良々木君？」

「……この状況、僕、やっぱりかなり危険なんじゃないのか……？」

「はっはー。正にその通りだよ。ピンチ、大ピンチ。さあどうするんだい阿良々木君。忍ちゃんも居ないんだから助けてくれる人は誰も居ないぜ？…ま、せいぜい頑張ってよ、僕は傍から笑いながら見てるから」

「……決めた。」

もし現実に戻れたら、僕はまずこのアロハのおっさんをぶっとばす。

【005】

「こんなふうに阿良々木君と二人で学習塾跡に向かうなんて、君がバンパイアハンターに襲われた時以来だね。はっはー、懐かしい懐かしい。今となっては良い思い出だよ」

……僕、あの時はなんだこのアロハのおっさんはってずっと思ってたなあ…。

現在、僕と忍野は数ヶ月前まで忍野が住んでいた学習塾跡に向かっている。

つまり忍野と二人で歩いている訳だが…。

うん、かなり恥ずかしい。

想像してみるといい。

ピンクっぽいアロハシャツを着た背の高いいかにも怪しげなおっさんと歩かされるのを。

…くそ、通りすぎる人からの視線が痛い。

「……何をきよろきよろしているんだい…。挙動不審で通報されてもおかしくないよ、今の阿良々木君…」

「お前のせいで怪しい物を見る目を浴びてる僕の気持ちになれ！」

「視線が気になるならその人達には消えて貰えばいいじゃないか。君の夢の中なんだからそれくらい出来るだろう？そんなことを気に

していたら、それこそ相手の思う壺だぜ？」

「……夢であろうと人を消すなんて僕には出来ねえよ」

「お人よしは相変わらず、か……」

……？

なんか、心なしか嬉しそうな顔をしたような……？

いや、気のせいかな。

「で、本当に学習塾跡まで行けば夢から覚めれるんだろ？」

「ああ、それは保障するよ」

学習塾跡に向かう目的。

それは、この夢から脱出するためだ。

忍野曰く

「ちゃんとした対策が立てられない以上、まず何よりも最優先すべきなのはこの世界からの脱出だよ。

今の状態でここに居ると相手の独壇場になっちゃう。

だから一旦この世界から逃げて、態勢を立て直すんだよ。

怪異を何とかするのはそのあと。

今は逃げる事だけに集中するでしょう。

で、脱出方法だけど、実は僕だけならいつでも好きなように脱出出来るんだ。

なんせ夢だからね、起きればいいだけの話さ。

でも阿良々木君、君はそうはいかない。

怪異にこの夢の世界に縛り付けられちゃってるんだ。

だから君は、この世界からそう簡単に逃げ出す事が出来ない。

だけど、逃げ出す方法が無い訳ではないよ、当然。

まあもしそうならこんな話をわざわざ君に話したりなんかしてないしね。

で、この世界から君が逃げ出すためには、要は僕が君を引っ張って行けばいいんだ。

つまり、僕が起きる時に君の意識を僕の意識に同調させて、君ごと僕を起こす、ってとこかな。

ただこのやり方には問題点があって、恐らく、いやほぼ間違いなく、相手が妨害してくるんだ。

さっきも言ったけど夢の中じゃ相手の独壇場だからね。

妨害されたら阿良々木君を引っ張って行くどころじゃない。

下手したら僕まで夢の中に縛られる。

もしそうなたら一巻の終わりって事くらい阿良々木君でもわかるよね。

でも一カ所だけ。

たった一カ所だけそれがなんとかある場所があるんだ。

例の、学習塾だよ。

あ、あと一つ言っておくけど、これは助ける訳じゃないからね。

当然報酬は貰うし、あくまで仕事だ。

僕は助けない。

君が勝手に助かるだけ。

……え？それはともかくあの学習塾は燃えて無くなった？

……だからさあ、阿良々木君。

ここは君の夢なんだって。

無いなら創ればいいだけの話じゃないか。

全くそんな事もわからないなんて。

元気いいなあ、何かいいことでもあったのかい？」

だ、そうだ。

……わかるようでわからない話だった。

忍野が言うならそうなんだろうけど、何だか釈然としない。
ていうかそんな事がわからない事と元気いいのは全く関係ないだろ
うが。

……うーん、なんか誤魔化してるのか、それとも隠してるのか…。
いや、考えたって僕には無理か。

見透かした男を見透かすような高度な技は、僕には出来ない。
今は忍野を信用するしかないしな。

信頼は大事。

それも忍野から教わった事だ。

「でもよ、忍野。何で学習塾跡なんだよ。パワースポットの意味
なら北白蛇神社の方がいいんじゃないのか？」

学習塾跡。

忍野が寢床にしていた場所。

羽川の苛虎によって炎上に更地になった。

なんでそんな場所でしか出来ないのか、さっきからずっと気になっ
ていたのだ。

「別に、パワースポットの事は関係ないよ。ていうか夢の中にパ
ワースポットも何もないって」

「じゃあなんなんだよ」

「地の利、に近いかな。阿良々木君は勉強するとしたら、自分の家
と大して馴染みのない他人の家、どっちがいい？」

……ごめん、忍野。

お前は自分の家って言って欲しいんだろうけど、僕は見ず知らずの
他人の家の方がいい。

なぜならうちには……邪魔物（妹と読む）がいるからさ…。

「……………」

「…うん、何か事情があるのはわかった。悪かったね。まあ、普通は自分の家だろう？ゲームとか趣味に走っちゃうから、常に緊張感のある他人の家の方がいいという意見の中にはあるんだろうけど、落ち着いて出来るならやっぱり自分の家だろう？」

「…まあ、そうなんだろうな」

「そういう事だよ。僕はあの学習塾なら全力を出せる。それだけの事さ」

「へえ…」

「……………うーん…。」

やっぱり何か釈然としないんだよなあ…。

信用するし信頼してるけど、なんかいつもの忍野らしくない。

……気のせい、ならいいんだけど。

しかしそれにしても、僕の家から歩いて学習塾まで行くのは初めてかもしれない。

意外に距離がある。

いつもは自転車で行ってたから気にならなかったんだけどなあ…。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

……今わかった。

いつもこいつは喋っていて、時には五月蠅いと思う事も少なくなかったのだが、黙られるのはもっとキツイ。

なんだよ、喋れよ忍野！

お前もお喋り好きなんだろう！？

僕だってどっちかと言うとそうなんだ、だから早くなんでもいいから喋れ忍野っ！

「……なんか、恥ずかしいね、阿良々木君」

「きめえっ！」

「はは、冗談だよ。流石に今のは僕も引いたし。気持ち悪かったね」

「わかってるなら二度と言うなよ…」

なんだよ忍野…。

マジできめえ…。

……もしかして体調でも悪いのか？

だから説明も釈然としない曖昧な感じ、なのか？

……ぱっと見普通に見えるけど…。

「わかったわかった、二度と言わないよ。でも雑談くらいならいいよね。まだ学習塾までは時間かかるし、そのくらい付き合ってくれるだろ？」

「あ？うん、まあ、別にいいけどよ」

雑談…。

もし下らない事だったら無視してやる。

「僕がいなくなったあと色々あったって言ってたけど、どんな事があったんだい？月火ちゃんだっけ。あの子がしでの鳥だって事は知ってるけど」

「なんだ、やっぱり知ってたのかよ」

だったら忠告くらいは残しとけての。

「まあね。でも放っていても大丈夫だと思ったし、実際、阿良々木君が何とかしたらしいじゃないか」

「……影縫さん、マジで死ぬと思ったんだからな」

「はは、あの子は僕と違って暴力的だからねー」

「まあ、貝木にもかなりやられたけどな。…って、そーいやお前、貝木にさえ苦手意識持たせてんだってな」

「なに、騙される前にハツタリかけて潰したり、わざと騙されたりすればいいだけの話さ。阿良々木君にだって……いや、やっぱり阿良々木君には無理かな。その性格じゃあねえ…」

「いや、だからそれが凄えんだって。ていうか性格を馬鹿にするな。こういう性格なんだから仕方ないだろ」

「違う違う。馬鹿にしてなんかいないよ。むしろ褒めてるくらいかな」

おお、まさか忍野に褒められる日が来るとは。

……全然嬉しくねえ。

「他には……まあ、お前ならどうせ知ってんだろ。羽川が苛虎を作り出したり、僕が過去に行ったり、千石が蛇神になったりだ」

「阿良々木君、本当に高校生とは思えないくらい着々と凄い経験積んでるねえ」

五月蠅い。

余計なお世話だ。

「あ、そうだ。高校生……というか学校と言えただけどさ。よく冬の体育とかで『寒いのは皆同じだから我慢しろ』とか、集会で座って『けつが痛いのは皆同じだから我慢しろ』って言われなかったかい？僕はあれ、すごく理不尽で暴力的な意見だと思うんだよね」

…確かに、それは僕もよく思う。

皆同じだからって、誰がそんな事わかるってんだ。

個人差って言葉があるように、どんなふうに感じてるかは個人個人違う訳じゃないか。

実際、体感温度なんてのは体質によって全然違って、冬でも暑いと感じる人はいるんだから。

それなのに環境が同じだからどう感じてるかと同じだと決め付けてそう言うのは、やはり理不尽で暴力的だと思う。

まあ、言いたい事はわからないじゃない。

皆同じ環境なのに一人だけ堪えられないのはみっともないとかなん

だろう。

しかし極端に言えばこれは、黙らせたいから適当にそれっぽい正論をでっちあげたというだけなんじゃないかとも思う。

ていうか実際そういうふうに使われている。

全く………こんなんだから――

「って、おわあぁっ!!?」

ドガンっ

と轟音をたて、大型トラックが僕がさっきまで居た場所を通り過ぎ民家に衝突する。

……おいおいおいおいおい。

僕今轢かれかけたぞ!?

「……阿良々木君、少し急ごうか」

「………」

無言で首を縦にブンブン振る。

異論は無い。

「走るよ」

忍野は言うやいなや駆け出した。
それを追う。

「い、今のも怪異の仕業なのか!?!」

「君の夢で君が死ぬのかい? 君は自殺願望でも持ってるのかい?」

「さっきまでは持ってたけど今は持ってねえよ！」

「なら怪異の仕業だ。本気で君を殺しにかかってきたんだね」

「……………」

マジかよ…。

くそっ、こんなところで死んで堪るかっ！

絶対生き抜いて、現実世界に戻ってやる！

「阿良々木君、跳んでっ！」

「…………お、おうっ」

ガコッ

…………道が、開いた？

いや、拓くのはひらくじゃなくて、開くのはひらく。

え、と、つまり、アニメな漫画みたいに道がいきなり開いて大きな落とし穴が出現したのだ。

忍野に言われなければ間違いなく落ちていた。

…………怖ええええええええっ！！！！

「何だよアレ何だよアレ！？落とし穴！？何でそんなものが道に仕掛けられてんだよ！」

「全く、ユニークな怪異も居たもんだねえ」

「呑気に言ってる場合か！また死にかけたんだぞっ！って言ってるそばからまたかよ！？」

今度は空から槍が降ってきた。

……………って

「こんなもん避けれるかーっ!」

死ぬっ、僕死ぬっ!

「だからここは夢なんだから何でも出来るんだってば!」

そう言う忍野を見ると僕達二人を軽く守れるくらいの大きな葉っぱを持っていた。

そしてその葉っぱはかなり堅いらしく、槍を通していない。

……そんなのアリなの!?

「何でもアリだよ阿良々木君。はは、これ案外楽しいね。阿良々木君も楽しめばいいのに」

「殺されそうなのに楽しむなんて無理だあああああっ!」

「ははっ。本当に元気いいなあ、何かいいことでもあったのかい?」

「ねえよ阿呆っ!」

……………僕、生きて帰れるのかな…。

【006】

「はぁ……はぁ……。疲れた……死ぬ…」

「おいおい阿良々木君。若いのにこの程度でくたびれてちゃ駄目じゃないか。僕みたいな中年でさえ余裕なんだぜ？」

「お前は……はぁ……はぁ……一般人じゃないだろうが…」

影縫さんもそうだったが、どうやら忍野も肉体的に常軌を逸しているらしい。

あれだけ走ったのに息一つ切らしていない。

……吸血鬼もどきの僕よりよっぽど化け物だ。

あのあと―――槍を辛うじて防いだあとも、僕の命を狙った攻撃はやまなかった。

むしろ時間が経つにつれ激化し、散々な目に遭わされた。

槍が降り止んだと思ったら今度は下から槍が突き出してきた、それをかわしたら今度は地雷ゾーンに突入。

そこかしこに地雷が仕掛けてあって何回黒焦げになったことか。

そしてその次はその辺の通行人達がいきなり襲ってきた。

やっこの思いで逃げ切ったと思ったら、忍野とはぐれてパニックになる。

やっと思付けたと思ったら忍野はゾンビに追い掛けられてる。また何とか逃げ切ったら、またトラックが突っ込んで来る。

そんな事が延々と続き、とうとうこの学習塾までノンストップで全力疾走させられた。

ふざけんな、殺す気か。

……殺す気か。

因みに最後は数千は居るんじゃないかという猫の大群に追い掛けられた。

僕は猫が苦手だけど、別に怖くはない。

ただこの大群は異様過ぎて怖かった。

想像してみろよ、何千もの猫ににゃーにゃー鳴かれながら追い掛けられるのを。

実際かなり怖いんだぜ？

忍野は「はっはっはー、猫と追い掛けっこだ。猫派の僕としては楽しくてしょうがないよ」などと言っていたが、情けない事に僕は絶叫しながら逃げてしまった。

二度とあんな思いはしたくない。

……ていうか、僕達怪異に弄ばれてないか？

猫に追い掛けられるとか、絶対どこかで見ながら楽しんでたろ。

殺す気あんのかよお前。

……いや、殺す気なくしてくれた方が僕としてはいいけどさ。

なんか、こう、真剣味にかけると言うか…。

「でもまあ結果としてここには早く来れたんだから良しとしようじゃないか。予定よりも三十分は早いよ」

「と、とりあえず……はあ……はあ……休ませてくれ……はあ……はあ……」

「はあはあ五月蠅いなあ、阿良々木君。女性でも見かけたのかい？いや、休みたいって事はもう事後なのかい？全く情けないよ」

「……はあ……はあ……。僕を……女性を見かけただけで興奮するよう
な……はあ……はあ……変態にするな……っ……！」

この野郎……。

苦しくてまともに喋れないのをいいことに好き放題言いやがって……。
……現実に戻ったら忍にも協力して貰って絶対ぶっ飛ばしてやる。

「スカートははいてるだけでエロいんだろ？風になびいてるのを見る
だけで、十分エロいんだろ？」

「……はあ……はあ……はあ……勿論だ」

何を当たり前の事を。

「……十分変態だよ、君は」

「うるせえ……」

……はあ……はあ……はあ……。

やっと落ち着いてきた……。

ふう……。

よし。

「……やっぱり、学習塾は夢の中でも燃えて無くなった事になって
るんだね」

今は更地となったそこを見ながら、忍野は言った。
心なしか、少し寂しそうに見える。

「そりゃまあ、僕は燃えてなくなるのを目の前で見てるからな。夢の中だってそうだろうさ。……で、創ればいいって言ってたけど具体的にはどうすりゃいいんだよ」

「なに、簡単な事だよ。学習塾をイメージして、ここに在ると思えばいいのさ。それで現れるはずだよ。……阿良々木君の想像力がよっぽど貧困でなければね」

最後の一文は余計だ。

まあ、とりあえずやってみよう。
目をつむる。

あの学習塾をイメージする。

忍野が住み着いていた、あの学習塾を。

影縫さんにボコボコにされた、あの学習塾を。

くらやみに襲われた、あの学習塾を。

目の前で燃え盛っていた、あの学習塾を。

……………。

目を開けると、さっきまで何も無かったそこにはあの学習塾が在った。

成功したようだ。

「うん、上出来だね。ご苦勞様」

「……なんか、懐かしいな」

「感傷に浸るのもいいけれど、まずは中に入ろうよ。また猫に追い掛けられたいのかい？」

「……それは御免だな」

「だろう？」

そう言って入っていく忍野。
僕もそれに続く。

「うん、なかなか細部まで再現出来てるじゃないか。阿良々木君、意外と記憶力高いんだねえ」

階段を登りながらそう言う忍野。

「馬鹿にしてるのかそれは？……まあ、怪異を知ってから何度も来た場所だからな。それに、色々思い出もあるし。イメージするのに苦労はしなかったよ」

まあ、思い出って言っても吸血鬼が人食ってたり、レイニーデビルに殺されかけたり、影縫さんに殺されかけたり、くらやみに消されかけたりとかだけだな。

……って、僕、ここで随分と嫌な目に遭ってるじゃないか…。

でも不思議と嫌な気分にはならないんだよな。

忍野とよく話した場所でもあるからだろうか。

……いや、それはないな。

「そうかい。なら奇遇だね。ここは僕にとってもなかなか思い出深い場所になってるんだよ」

「そうなのか？」

思い出とか大切にするタイプに見えねえけど。

「前にも言ったじゃないか。人とかこんなに喋ったのは君が初めてだ

って。喋ったのは殆どここだぜ？」

「ああ……そういやそうだったな」

畜生。

僕と似た事考えてやがった。
気持ち悪い。

「……阿良々木君」

「……なんだよ」

なんだ、この雰囲気。
変な事言い出すんじゃないぞ。

「阿良々木君は、僕のことどう思ってくれてるかな」

「………」

キモい。

いや、マジで。

これが本当に忍野かよ……。

……でも、割と本気……みたいだから無下には出来ないよな、仕方ねえ……。

「この上なく怪しくて信用ならないアロハのおっさん。……ていうのが第一印象で。今は……頼りになるお人よしの怪しいおっさんだな」

「はは、どっちにしろ怪しいおっさんなのかい僕は」

ま、仕方ないか、と笑う忍野。

なんだかとても楽しそうだ。

……キモいキモいキモい。

こいつ、マジで忍野か!?

「僕はね、阿良々木君」

その辺にあった机をひっつけ、そこに寝転がりながら話し出した。

「君の事を親友だと思っているよ。さっきも言ったけど、僕とこんなに喋ったのは大学時代の奴らを除けば君だけなんだ。今まで結構沢山の怪異に曳かれた人達と接触してきたけど、皆僕の事を気味悪がるんだよね。そのせいで依頼人とも必要最低限の話しかない事が多いし、事が済んだらはいサヨナラで二度と喋らない事が殆どなんだよ。まあ僕がそういうふうになるように振る舞ってるっていうのもあるんだけどさ。でも阿良々木君、君は違った。吸血鬼の事が解決しても、君は僕のところへ来てお喋りに付き合ってくれた。忍ちゃんに血を与えるのが目的ではあったけど、もし忍ちゃんが居なかったとしても君はきつと来てただろう？僕はあんまり人と関わらないけど、人間関係が嫌いって訳じゃないからね。阿良々木君の行動はすごく嬉しかった。……だから、阿良々木君。僕は極めて一方的で理不尽かもしれないけれど、君を親友だと思っているんだよ」

「……忍野……」

「おっと。あくまでも親友だからね。あっち系の、よくあるメメラギ的な関係ではないよ。ていうかそんなの願い下げだ。気持ち悪い」

「んな事言われなくてもわかってんだよ!」

感動を台なしにするなよ！
僕結構感動してたんだぜ？

「はは、冗談冗談。おっさんはちよくちよく冗談を言いたくなる生物なんでね、許してくれよ。……たださ、まだ一つ言いたい事……ていうかお願いがあるんだけど」

ん、なんだよ。

別にそんな前置きしなくたって、普通に言えればいいじゃないか。

「言えよ」

「一方的に親友だと思っててるのもいいけどさ、お互いが親友だと思ってるのもいいと思わないかい？」

「……」

……まったく、忍野も素直じゃねえなあ……。

「忍野」

「なんだい」

「お前は恩人だ。僕を、戦場ヶ原を、羽川を、八九寺を、神原を、千石を、助けてくれた。お前は助けてなんかないって言うんだろけど、僕達はお前を助けてくれた恩人だと思ってる。……それに僕は、お前に見透かされるのや、お前の長ったらしい話は嫌いじゃないんだ。だから、僕もお前を親友だと思ってるんだよ、忍野メメ」

さあ、これでどうだ忍野メメ。
さっきは感動させられたからな。
感動させ返してやる。

さあ感動しろ感動しろ。

お前の嬉し涙を見てやるぜ！

「……阿良々木君」

「なんだよ」

「言ってて恥ずかしくないかい？」

「お前なんか大っ嫌いだ畜生っ！」

こいつ最低だっ！

言わせておいて何言いやがる！

あーあー、顔が熱いな畜生っ！

ああ恥ずかしかったよ恥ずかしかったさ！

それでも勇気出して言ってやったってのに……畜生っ！

「くくく……くはははっ、はははははっ」

「何笑ってんだよてめえっ！殴んぞコラァッ！」

「いやいや、違うって。そんな怒るなよ、ただのおっさんの冗談じやないか。全く本当に元気いいなあ、何かいいことでもあったのかい？」

うわー、ムカつく。

ここにきて今更だけど、その決め台詞めちゃうちゃムカつく。

いいことなんて何もねえよ！
なんせ親友に裏切られたからなあっ！

「はは、そう睨むなって。……あー、やっぱり楽しいなあ、阿良々木君と喋るの。阿良々木君はどうだい？ 久しぶりの僕とのお喋りは」

「ああ楽しすぎてお前を殴りたいよ！」

「そうかいならよかった。……じゃ、そろそろ――」

「ん？ ああ、夢を脱出するのか？ ……やっとかよ。疲れたぜ……」

「阿良々木君を、殺すとしようかな」

【007】

……今こいつ、何て言った？
僕を……どうするって言った？

「ちょ、忍野。いくらなんでもそれは笑えねえって」

「冗談なんかじゃないよ。本気の本気さ」

へらへら笑いながら、そう言い放つ忍野。

「……いや、お前、今何言ったのかわかってんのか？」

「阿良々木君を殺す。そう宣言したつもりだったけど？」

「……ふざけんなって。マジで怒るぞ」

「ふざけてなんかいないさ。僕は大真面目だよ」

忍野は飄々とそんな事を言った。

「それとも君は、僕に違和感を感じなかったとでも言うのかい？」

「……それは…」

…感じた。
感じてた。

おかしいと思った事は……正直沢山あった。

例えば。

現れるタイミングが良すぎた。

例えば。

言ってる事が根拠のない当て推量ばかりだった。

例えば。

らしくない事を言っていた。

例えば。

決め台詞や懐かしい台詞を多用していて、まるで僕は忍野メメだと強調しているような印象を受けた。

例えば。

……あからさまに、僕を助けてくれた。

でも……だけど……そんなこと…。

「でも……なんで……なんでだよ…忍野…」

「なんで？はっ、君はそこまで馬鹿なのかい？それがわからないなんて、この忍野メメとか言う奴は随分と君に手を焼いたんだろ？ねえ。同情するよ。でも、本当は違うだろ？頭ではわかってんだろ？認めたくないってだけなんだろ？」

……頼む。

僕が間違っていてくれ。

馬鹿でいいから、勘の悪い奴でいいから、間違っていてくれ。

「……お前が、怪異だったんだな」

「ご名答。どうだった？ 僕の演技は」

心が壊れる、音がした。

「……う……うわあああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああっ……」

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ。

違う、違うだろ。

お前は忍野メメなんだろ。

僕がまた怪異に関わったのを知って助けにきてくれたんだろ。

さっきまで一緒に喋ってたじゃないか。

そうだ、そのはずだ。

お前は忍野だ、忍野メメなんだ。

この世界で唯一の味方、忍野メメなんだ。

そうだろ？

そうなんだろ？

そうだって言ってくれよ頼むから。

なあ、忍野……。

「はは、この忍野メメのおかげでなんとかあった精神が、再崩壊したのかい？ みつともないねえ、阿良々木君。しかしそれにしても君は随分と面白い人間だよな。だってちょっと助けてあげただけで僕を忍野メメだと決め付けて、ちよっとそれっぽい事を言っただけで感動しちゃうんだから。いや、それほどこの忍野メメって奴を信

頼してるからなのかい？はっはー、じゃあ今はその信頼してた人間に裏切られた気分なんだね。可哀相に」

「……うつ……うつ……」

「おやおや、また泣いてるのかい？全く阿良々木君は本当に情けないねえ。……じゃあ、死ねよ」

聞こえると同時に、腹に強い衝撃が走る。

蹴られたようだ。

吹っ飛ばされ、壁にめりこむ。

「……か……はっ……」

影縫さん程でないにしろ、常軌を逸した破壊力だ。

「まだまだいくよ」

二撃、三撃、四撃……。

痛みを感じやすい箇所を的確に狙って、加減して攻撃してくる。

しかしそれでも一撃一撃が重く、速く、声をあげる事すらままならない。

吸血鬼の弱点、呼吸器系へのダメージが特に酷いようだ。

「言っておくけど簡単には殺してあげないからね。徹底的に痛め付けるだけ痛め付けたら、そのまま放置しておくよ。そうすれば苦しんで死ねるだろ？」

……もう……どうでもいいか……。

どうせ一回は死ぬところだったんだ。

それが、少しの間とは言え生きながらえて、希望まで持てたんだ。そのせいで今は一気に絶望に落とされた訳だけど……もういい。もう皆死んだんだ。

ここが夢で、目覚めさえすればそれで皆生きてるとか、関係ない。だって僕は皆の死を経験してるんだ。

夢だろうが現実だろうが同じ事だ。

だったらもう……生きれない。

死んだ方がいい、死んだ方が楽だ。

死にたい……消えたい。

そんな事を考えている間にも、攻撃はとめどなく続いている。

夢なんだからイメージさえすれば最盛期の忍くらしいの不死力や破壊力を持てるのかもしれないが、そんな事はしない、する気もない。

「おいおい阿良々木君。抵抗しないのかい？いくらなんでもそれじゃ僕が面白くないじゃないか。僕は幸せな奴を不幸のどん底に落とす怪異なんだぜ？さっき折角元気付けてあげたんだからさ、もっと頑張ってくれなきゃ」

「……五月蠅い……僕はもう…死ぬんだ…」

「……そんな阿良々木君、見たくないな」

「……っ…」

叩かれた。

左頬に、綺麗に平手打ちを喰らった。

「ねえ、阿良々木君はそんな奴だったかい？そんな弱っちくて甘ったるい人間だったかい？いつも泣きながら戦って、皆を助けて来たんじゃないのかい？どんなに辛くても頑張って、生き抜いてきた

んじゃないのかい？」

「……だから…その皆が……今は居ないんだろうが…」

「……面白くないんだよ、君がそんなんじゃない。不幸のどん底に落ちて面白いのは、幸福そうな奴なんだよ」

「……早く……殺せよ…」

もう、どーでもいいんだ。

お前の事情なんか知ったこっちゃない。

早く殺せ。

「……さっきの君の言葉は、本音じゃなかったのかい？僕は君の親友なんじゃなかったのかい？」

「………」

……だから、その親友もこの世界じゃどっかで死んでんだろ…。
もうそんなの関係ねーんだよ…。

「……腑抜けたね、阿良々木君。被害者面は気に喰わないって言ったじゃないか」

「………」

「はっ、そうかよ。それが阿良々木君の答えで結末かよ。全く……忍野メメは君に一体何を教えたんだろうね。それに、君の友人達は君を何にも成長させてないどころか、むしろ退化させてるのかい？全くあの子達は役立たずだねえ。……まあ、それも仕方ないか。」

だってあいつら、実際はただの変態達だもんね。うん、そうだ。それなら阿良々木君が成長出来ないのは仕方ないじゃないか。全部周りが悪いんだから。そう考えれば君は実は幸せじゃなかったのかもね。そうかそうか、それは悪い事をしちゃったもんだ。君も僕を作った人間達と同じで、実は不幸な人間だったんだね。心の底ではきつと思ってたんだろう？あんな人間達に付き合わされるなんて、とか。なんで僕ばかり嫌な役目を負うんだ、とか。全くそう考えると阿良々木君は本当不幸だよね。あんな人間達に囲まれて…。うん、わかった。君を現実に戻してあげるよ。こんなこととして悪かったね。現実に戻ったら、今の人間達とはきっぱり縁をきって、新しい友人を探すといいよ。

君は幸せになっても殺さないっていう例外にしてあげるから、せいぜい幸せになってよ」

……てめえ、今何て言った？

「……おい…ふざけんなよ…」

「うん？何か言ったかい？」

「ふざけんなって言ったんだよこの野郎！」

僕は叫んでいた。

どうやらこいつは――僕の逆鱗に触れてしまったらしい。

「あいつらが僕を退化させただ？あいつらがただの変態だ？あいつらが役立たずだ？あいつらが僕を不幸にしてるだ？はっ、ふざけんな！」

僕は今まであっただろうかという剣幕でまくし立てる。

「ああ認めるよ、あいつらは全員変態だ。一人残らず皆極度の変態だ。あいつらのせいで僕は今までかなり嫌な目に遭ってもきたし、僕も変態にさせられた。それどころかあいつら本人に殺されかけたり監禁されたり骨が見えるくらい噛まれたり自転車ぶっ壊されたりあろうことか現在進行形で神様になった奴から卒業式に殺すって宣告されてる。……でもな――」

少し間を入れる。

溜めだ。

「僕はあいつらと出会ってから、一瞬足りとも不幸だと思った事はねえんだよ！」

――僕はキメ顔でそう言った。

「むしろ今思えば僕があいつらと会う前は随分不幸だった。人間強度なんて馬鹿みたいな事を考えて、自分で自分を不幸にしてた。加害者なのに被害者面して不幸になってた。でもあいつらはそんな僕を助けてくれた！忍野メメは特にそうだ！僕を吸血鬼から助けてくれ、そして弱さを厳しく指摘してくれた。あいつが居たから今の僕はここに居る！他の奴らだってそうだ。戦場ヶ原も、羽川も、神原も、八九寺も、千石も、忍も、皆そうだ！皆が僕を助けてくれた！皆が僕を幸せにしてくれた！」

「へえ、そうかい。でも自分が不幸なのを認めるのが嫌で、そう思おうとしてるだけなんじゃないの？」

「いや絶対に違う！あいつらは僕を幸せにしてくれた！僕を成長させてくれた！僕を助けてくれた！お前が言った事は何もかも的外れで、馬鹿馬鹿しい当て推量でしかないんだよ！」

「ははっ、随分と元気になっちゃったもんだ。で、その幸せな阿良々木君はどうするつもりだい？」

「お前は交渉に応じるつもりはあるか？」

怪異に遭ったとき。

まずは暴力で何て言う考え方は忍野は嫌った。
平和主義だ。

「ないね。更々ないよ」

「なら戦争だ」

交渉が無理なら暴力。

「お前は僕の友人達を馬鹿にした。僕はそれを許す気はない。それにお前を倒せば僕は目覚めれるんだろ？つまりお前を倒せば一石二鳥な訳だ」

「暴力的だねえ。でもそれでいい。それがいい。……さあ、おいで阿良々木君。君を不幸のどん底に落として絶望に墮として地に落とすよ」

「それはこっちの台詞だ！」

僕は忍野——の格好をした怪異に、飛び掛かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2068ba/>

死物語【こよみメモ】

2012年1月9日22時47分発行